キラキラネームは本当に増加しているのか？

荻原 祐二（東京理科大学 教養教育研究院，yogihara@rs.tus.ac.jp）

Have kirakira names really increased?

Yuji Ogihara (Institute of Arts and Sciences, Tokyo University of Science, Japan)

Abstract

People in general frequently discuss the uniqueness of kirakira names and the pros and cons of kirakira names on the assumption that the rates of kirakira names have increased over time in Japan. However, empirical evidence that shows an increase in kirakira names was not directly provided, leaving it unclear whether the rates of kirakira names really increased. Therefore, this article discusses whether kirakira names indeed increased based on empirical evidence. Specifically, by taking account of previous research that clarifies the definitions of kirakira names and the components of these definitions, this article assesses whether names with each of the components have increased. Consequently, under the broad definition “low-frequency names,” kirakira names have increased, based on prior research indicating an increase in unique names in Japan. In contrast, under the narrow definitions that have three additional components (“names that deviate from traditions,” “names that are difficult to read,” and “names that are used in positive or neutral contexts”) within the category of “low-frequency names,” there is no evidence that examines historical changes in the rates of kirakira names, leaving it impossible, at least at present, to insist that kirakira names have increased. Moreover, this article shows that it is impossible to claim that kirakira names that follow the definitions provided in representative dictionaries and encyclopedias have increased. This article discusses whether kirakira names have really increased based on empirical evidence, contributing to an accurate understanding of society, culture, human, and language, and leading to the advancement of practices and applications in the correct direction.

Key words

kirakira name, name, naming, evidence, DQN name

1. はじめに

キラキラネーム[(1)]とは、広義では「頻度が低い名前」を意味し[(2)]、狭義では「頻度が低い名前」に加えて「伝統から逸脱した名前」や「読むことが難しい名前」、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」といった要素を併せ持つ名前を意味する（荻原，2022a）。例えば、「俗に、一般的・伝統的でない漢字の読み方や、人名には合わない単語を用いた、一風変わった名前」（大辞泉）や「通常の名付けの型にはまらない名前を俗にいう語」（大辞林）と定義されている。

マスメディアやインターネットメディアなどを含めた世間一般では、このキラキラネームが増加していることを前提として、その奇抜さや是非について主張や議論がされていることが多い（e.g., 伊藤，2015; 牧野，2012）。例えば、朝日新聞社が提供する現代用語事典である知恵蔵 mini では、2012 年の段階で、「DQN ネーム」の説明として、「社会的に許容されにくい日本の子どもの名のこと。いわゆる珍名であり、『キラキラネーム』とも呼ばれる」とした上で、「近年、DQN ネームとされる名前の子が急増しており、賛否両論が巻き起こっている」と記載されている。

しかし、キラキラネームが本当に増加しているのかは明らかでない。キラキラネームに関する主張や議論は、個人的経験や主観的推測に基づいていることが多く、エビデンス（科学的根拠）が提供されていないため、その主張や議論の正当性を評価することができない。ある個人が、「日本でキラキラネームが増加している」と感じていても、それが現実を正しく反映しているとは言えない。キラキラネームのインパクトが大きいために、その出現頻度を実際以上に多く見積もっているだけかもしれない。また、マスメディアやインターネットメディアなどで取り上げられる機会が増えることによって、実際の出現頻度が増加しているように感じているだけかもしれない。さらに、キラキラネームという概念を認知することで、そうした名前に注意が配分されやすくなり、キラキラネーム以外の名前に注意が配分されにくくなっているだけかもしれない。こうした記憶や推論、注意などにおける、認知のバイアスに基づく誤った結論である可能性だけでなく、仮にキラキラネームの増加が実際に生じていたとしても、それはその個人の観測範囲内や局地的・偏在的に生じているだけで、日本全体の平均的な傾向を反映していないかもしれない。そもそも、その主張や議論の中で、「キラキラネーム」の定義や意味が明確に示されていないために、その主張や議論の内容自体が不明確であることが多い（荻原，2022a）。

1.1 キラキラネームが本当に増加しているのかを検討する意義

キラキラネームが本当に増加しているのかをエビデンスに基づいて検討することは、少なくも 2 つの点で重要である。第 1 に、社会や人間、文化や言語を正確に理解することに貢献する。キラキラネームを与えること、そ

してその割合が増加しているという社会現象や人間行動の記述が誤っていれば、それを基にした社会や人間、文化や言語に対する理解や考察（e.g., 小林，2009; 大藤，2012; 佐藤，2007; 坂田，2006）も誤ることになり、それを避ける必要がある。

第 2 に、キラキラネームが本当に増加しているのかをエビデンスに基づいて検討することは、基礎的な理解に基づく実践や応用を正しい方向に導くことに貢献する。前提となる理解が誤っていれば、それを用いた実践や応用は誤った方向に進むことになり、避けるべきである。注目され多くの人が興味・関心を持つテーマだからこそ、正確な理解が特に必要であり、もしその理解が誤っているのであれば修正する必要がある。例えば、本論文の執筆時（2022 年 10 月）には、戸籍の氏名にこれまでは登録されていなかった読み仮名を新たに含めるために、法務省が戸籍法の改正に取り組んでいる。戸籍に氏名の読みを含めることを法制化する中で、これまでは全く制限がなかった漢字の読みをどの程度制限すべきかについても議論されている。この過程で「キラキラネーム」という言葉が、法務大臣の諮問機関であり、戸籍法の改正案を作成している法務省法制審議会戸籍法部会における公的な会議においても用いられており（法務省，2021; 2022a; 2022b）、法律の内容に影響を与える可能性がある。キラキラネームが増加していることを前提として、それに対して肯定（もしくは否定）することによって、法律の内容や今後の政策を議論することは、進むべき方向性を誤らせてしまう可能性がある。

1.2 本論文

そこで本論文では、キラキラネームの定義とその構成要素を整理した先行研究（荻原，2022a）を踏まえて、キラキラネームが増加しているのかどうかについて、エビデンスを基に議論する。荻原（2022a）は、キラキラネームの定義が曖昧であることを指摘し、定評のある辞典・事典の定義を収集・整理して、キラキラネームの定義とその構成要素を概観した。その結果、キラキラネームの基本的な構成要素は「頻度が低い名前」であることであり、さらに 3 つの構成要素（「伝統から逸脱した名前」、「読むことが難しい名前」、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」）が含まれていることを明らかにした。この 4 つの構成要素それぞれについて、条件に合致する名前が日本で増加しているかどうかを概観する（表 1）。

2. 頻度が低い名前は増加しているのか？

頻度が低い名前の割合が日本で経時的に増加していることは、複数の研究から実際に示されている。Ogihara（2021a）は、明治安田生命保険相互会社が公開している新生児の名前データを用いて、2004 年から 2018 年における低頻度の名前の割合の変化を検討した。ここでの低頻度の名前とは、サンプルに占める割合が 0.10 % 以下の名前、つまり 1,000 人以上に 1 人しか持っていない名前とされた。分析の結果、低頻度の名前の割合が増加していることが明らかとなった。加えて、0.10 % から 0.05 % ずつ増減させた、0.05 %（2,000 人に 1 人）と 0.15 %（2,000 人に 3 人）の基準を用いても、同一の結果が得られた。

さらに、Ogihara & Ito（2022）は、全国の様々な地方自治体の広報誌から新生児の名前を収集し、1979 年から 2018 年における低頻度の名前の割合の変化を検討した。ここでの低頻度の名前とは、同じ自治体内で 1 年以内に生まれた他の新生児と重複していない名前とされた。分析の結果、低頻度の名前が 40 年間にわたって増加していることが明らかとなった。また、基準とする期間を 1 年から 3 年に延ばした分析を行っても、一貫した結果が得られた。

加えて、毎年公開されている、人気のある名前ランキングに含まれる高頻度の名前の割合が、2004 年から 2013 年にかけて経時的に減少していたという知見も報告されている（Ogihara et al., 2015）。同様に、Ogihara（2021a）で用いられたデータに対して、低頻度の名前ではなく、高頻度の名前の変化を分析した所、高頻度の名前の割合は 2004 年から 2018 年にかけて経時的に減少していた（Ogihara, 2022a）。これらの知見も、低頻度の名前の割合の増加を支持する結果と言える。

したがって、少なくとも 1979 年から 2018 年においては、頻度が低い名前の割合は増加していることが示されている。そのため、広義のキラキラネームは増加していると言える。

表 1：キラキラネームの定義を構成する要素とその経時的変化、およびそのエビデンス

	構成要素	経時的変化	エビデンス
広義	頻度が低い名前	増加	Ogihara (2021a) Ogihara (2022a) Ogihara et al. (2015) Ogihara & Ito (2022)
狭義	伝統から逸脱した名前	不明	なし
	読むことが難しい名前	増加？ *	Ogihara et al. (2015)
	肯定的または中立的な文脈で用いられる名前	不明	なし

注：キラキラネームの定義を構成する要素は、荻原（2022a）に基づく。狭義は、広義の「頻度が低い名前」に加えて、それぞれの構成要素を含めた名前となる。エビデンスの有無は、本論文執筆時点（2022 年 10 月）での状況を示す。* 読むことが難しい名前の増加が示唆される知見は少数ながら提供されているが、限界点も指摘されており、十分なエビデンスがあるとは言えない（詳細は脚注 4 参照）。

3. 伝統から逸脱した名前は増加しているのか？

伝統から逸脱した名前の割合が増加していることを示すエビデンスは、少なくとも現状では見当たらない。何をもって「伝統的な名前」とするか、そしてそこから何がどのように異なっていると、その「伝統から逸脱している」と見なされるのかを定義し、実際の名前データを用いて分析を行う必要がある。こうした作業を一定の基準以上で行っている研究は、少なくとも今の所見当たらない。よって、伝統から逸脱した名前が増加しているかは現状では明らかではない。

4. 読むことが難しい名前は増加しているのか？

「（命名者が与えた通りに名前を）読むことが難しい」ということには、「漢字の読みが分からないために読むことが難しい」と「可能な読みが複数あり、どれが正しい読みか分からないために読むことが難しい」という、少なくとも 2 つの意味がある（荻原，2022b）。そのため、それぞれの意味において、読むことが難しい名前が増加しているかを検討する必要がある。

4.1 読みが分からないために読むことが難しい名前は増加しているのか？

漢字の読みそのものが分からないために、読むことが難しい名前がある。近年では、漢字の一般的・慣用的な読みだけでなく、外国語読みする場合（e.g.,「海（まりん）」・「光（らいと）」）やイメージ読みする場合（e.g.,「星（あかり）」・「月（らいと）」）、表記はされるが読まれない場合（e.g.,「大空（そら）」・「心結（こころ）」）などがあり（荻原，2015; Ogihara, 2021b）、これまでにはあまり見られなかった読みが与えられている場合がある。そのために、命名者が与えた通りの漢字の読み方をすることが難しい名前が存在する。

このような、読みが分からないために読むことが難しい名前の割合が増加している可能性はあるが、そのことを示すエビデンスは、少なくとも今の所、見当たらない。人々が思いつく、予想可能な読みと実際の読みに違いがある名前を同定し、その割合の経時的変化を分析する必要がある。これらを一定の基準以上で行っている研究は、少なくとも今の所見当たらない。よって、読みが分からないために読むことが難しい名前が増加しているかは不明である。

4.2 可能な読みが複数あるために読むことが難しい名前は増加しているのか？

可能な読みが複数あり、どれが命名者によって与えられた正しい読みか分からないために、読むことが難しい名前がある。これは、漢字を読むことはできるが、その可能な読みが複数存在するために、どれが正しい読みなのかがわからないことを意味する（Ogihara, 2020）。事前情報 (3) がない場合、それぞれの可能な読みは独立で、確率分布も未知であるため、概して推測が困難である。そして、複数の漢字で構成された名前の場合、それぞれに可能な読みの組み合わせが生じるため、正しい読みを予測することがさらに難しくなる。

実際に、近年の名前には多くの読みが存在することが、エビデンスと共に指摘されている。例えば、人気のある表記である「大翔」には少なくとも 18 種類の読みが、「結愛」には少なくとも 14 種類の読みが与えられていることが、実際の名前データを基に報告されている（Ogihara, 2021c; 2022b）。これらの表記に対して、どの読みが正しいのかを初見で推測することは容易ではない。

このような、可能な読みの選択肢が多いために読むことが難しい名前の割合が増加している可能性はあるが、そのことを示すエビデンスは、少なくとも今の所、十分に存在するとは言えない。(4) よって、可能な読みが複数あるために読むことが難しい名前が増加しているかは、現状では明らかではない。

4.3 まとめ

それぞれの意味において、読みの難しい名前が増えているということを示す十分なエビデンスは提示されていない。よって、読むことが難しい名前が増加しているかは現状ではわからない。

5. 肯定的または中立的な文脈で用いられる名前は増加しているのか？

肯定的もしくは中立的な文脈で用いられる名前の割合が増加していることを示すエビデンスは、少なくとも今の所、見当たらない。名前がどのような文脈で用いられているかを明らかにし、それぞれの文脈が肯定的か否定的か、または中立的かといった判別を行い、その経時的変化を検討する必要がある。これらを一定の基準以上で行っている研究は、少なくとも今の所見当たらない。よって、肯定的もしくは中立的な文脈で用いられる名前が増加しているかは現状ではわからない。

6. 辞典・事典の定義に基づくキラキラネームは増加しているのか？

ここまで、荻原（2022a）の整理した定義に基づき、キラキラネームを構成する各要素に合致した名前が増加しているかどうかを概観してきた。ここで、荻原（2022a）の定義の元となっている、辞典・事典のそれぞれの定義に基づいて、キラキラネームが増加していると言えるのかについても言及しておく。

荻原（2022a）が対象としている 6 つの定義はすべて、「頻度が低い名前」であることに加えて、先述の 3 つの構成要素（「伝統から逸脱した名前」、「読むことが難しい名前」、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」）の内の少なくともひとつの要素を必ず含んでいる。そのため、どの定義を用いても、キラキラネームが増加しているかは現在の所、明らかでないということになる。

例えば、知恵蔵 mini では、キラキラネーム（DQN ネーム）を「頻度が低い名前」であることに加えて、「伝統から逸脱した名前」であることを定義としている。先述の

通り、「頻度が低い名前」の増加を示すエビデンスは存在するが、「伝統から逸脱した名前」の増加を示すエビデンスは存在しないため、この定義に基づくキラキラネームが増加しているかは現状では不明である。さらに、知恵蔵 mini では、キラキラネーム（DQN ネーム）を「奇異に感じられる」名前であると説明しており、2012 年の段階で「近年、DQN ネームとされる名前の子が急増しており、賛否両論が巻き起こっている」と記載しているが、「奇異に感じられる」名前が「急増」していることを実証するエビデンスは、10 年経った現時点（2022 年 10 月）でも提示されていない。知恵蔵 mini におけるキラキラネーム（DQN ネーム）の定義では、「奇異に感じられ」そして「社会的に許容されにくい」名前としているため、対象とする名前が奇異に感じられるかどうか、社会的に許容されにくいかどうかを何らかの方法で測定した上で、それらに該当する名前の割合の経時的変化を検証しなければならない。奇異に感じられるかどうか、社会的に許容されにくいかどうかは個人の主観に大きく依存し、個人差や地域差・時代差などもあると考えられるため、その測定自体が容易ではない。

7. まとめ

世間一般では、キラキラネームが増加していることを前提として、その奇抜さや是非について主張や議論がされていることが多いが、キラキラネームが本当に増加しているのかは明らかでなかった。社会や人間を正確に理解し、正しい方向に実践や応用を進めるためにも、キラキラネームが本当に増加しているのかを検討する必要がある。そこで本論文では、キラキラネームの定義とその構成要素を整理した先行研究（荻原，2022a）を踏まえて、キラキラネームが増加しているのかどうかを明らかにするために、4 つの構成要素それぞれの条件に合致する名前が日本で経時的に増加しているのかどうか、エビデンスを基に議論した。

その結果、「頻度が低い名前」とする広義では、個性的な名前が日本において増加しているという一連の研究（Ogihara, 2021a; 2022a; Ogihara et al., 2015; Ogihara & Ito, 2022）から、キラキラネームは増加していると言えることが明らかとなった。一方で、「頻度が低い名前」に加えて、3 つの構成要素（「伝統から逸脱した名前」、「読むことが難しい名前」、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」）を加えた狭義では、どの構成要素においても、その要素と合致した名前の割合が増加しているとは言えないことが示された。どの構成要素においても、その要素を満たした名前の割合が増加していることを示す科学的根拠は存在せず、少なくとも現時点では、その増減は不明であり、増加しているとは言えないことが明らかとなった。よって、「キラキラネームは増加しているのか」という問いの答えは、「定義に依存する」ということになる。広義では増加していると言えるが、狭義ではどの構成要素を採用しても、キラキラネームが増加しているかは不明である。また、定評のある辞典・事典の定義を用いても、キラキラネームは増加しているとは言えないことが示された。

本論文は、「キラキラネームは増加していない」ということを主張している訳ではない。キラキラネームは実際に増加しているかもしれないが、その変化を実証するエビデンスが今の所提示されていないために、「『キラキラネームが増加している』とは言えない」ということを主張している。「現状では明らかになっていない」ということを明らかにすることにも意義があり、「キラキラネームは増加していない」ということを主張することとは質的に異なるため、注意が必要である。

7.1 限界点と今後の展望

本論文では、現時点で「キラキラネームが増加しているのか」について、整理した。あくまで現時点でのエビデンスの有無についてまとめたものであり、この状況は今後検討が進むにつれて変化していくと考えられる。科学的根拠が示されていないものの、解明すべき重要な問いについては、今後検討を行い、エビデンスを提供することが求められる。本論文は、キラキラネームの増減に関する現状を把握し、今後の研究の方向性を示した点でも、意義がある。

注

(1) 「きらきらネーム」や「キラキラ名」等の表記も存在するが、荻原（2022a）が示す通り、「キラキラネーム」が最も一般的に用いられている表記であるため、本論文でも「キラキラネーム」と表記することとする。

(2) ただし、キラキラネームを「頻度が低い名前」という広義で使用し、以下に説明している構成要素を含まない場合、敢えてキラキラネームという抽象的なラベルを付けて呼ぶ必要があるのかは疑問である（荻原，2022a）。「個性的な名前」や「頻度が低い名前」、「珍しい名前」などと直接意味を説明した方が分かりやすく、誤解を与えることもない。

(3) 事前情報の例として、兄弟姉妹・両親等の名前が挙げられる。兄弟姉妹で共通した読みを与えるパターンや、両親の読みと一貫させるパターンが存在するため、その一部が分かれば、関連する名前の読みの推測が容易になる場合がある。また、表記に対する読みの選択肢と各選択肢の出現頻度を示した確率分布も、有効な事前情報となり得る（Ogihara, 2021c）。同年代の同じ表記を持つ名前の読みの確率分布が分かっていれば、読みの予測精度は上がると考えられる。

(4) 可能な読みの選択肢が経時的に増加している可能性は指摘されており（Ogihara et al., 2015）、そのために読むことが難しい名前の割合が増加している可能性がある。2004 年から 2013 年において、人気のある表記トップ 10 の中で、読みが複数ある表記の割合の推移を分析した所、男女共に増加していた。さらに、人気のある表記トップ 10 における読みの種類の平均値の推移を分析した所、男児においては増加していなかったが、女児

においては増加していた。男児の平均値の結果は、女児と異なり、2004 年当初から平均値が 2 を超えているために、天井効果が見られた可能性が指摘されている。しかし、これらの知見は、人気のある表記トップ 10 における、読みの種類数の平均値と読みが複数ある表記の割合の変化であり、当該年における新生児の表記という母集団の中の一部における変化であることに注意する必要がある。新生児の名前の読みの選択肢が増えているかどうか、そしてそれによって読むことが難しくなっているかどうかを明らかにするためには、サイズが十分に大きく、代表性の高いサンプルに対する更なる検証が必要となる。

引用文献

法務省（2021）．法制審議会戸籍法部会第 1 回会議（令和 3 年 11 月 25 日開催）．https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20211125.html.

法務省（2022a）．法制審議会戸籍法部会第 4 回会議（令和 4 年 3 月 17 日開催）．https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20220317_00003.html.

法務省（2022b）．法制審議会戸籍法部会第 7 回会議（令和 4 年 8 月 2 日開催）．https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20220802_00001.html.

伊藤ひとみ（2015）．キラキラネームの大研究．新潮社.

小林康正（2009）．名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク．風響社.

牧野恭仁雄（2012）．子供の名前が危ない．KK ベストセラーズ.

荻原祐二（2015）．近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型．人間環境学研究，13（2），177-183.

Ogihara, Y. (2020). Unique names in China: Insights from research in Japan—Commentary: Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, 11, 2136.

Ogihara, Y. (2021a). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 2, 100056.

Ogihara, Y. (2021b). How to read uncommon names in present-day Japan: A guide for non-native Japanese speakers. *Frontiers in Communication*, 6, 631907.

Ogihara, Y. (2021c). I know the name well, but cannot read it correctly: Difficulties in reading recent Japanese names. *Humanities and Social Sciences Communications*, 8, 151.

荻原祐二（2022a）．キラキラネームの定義とその構成要素．人間環境学研究，20（2），1-9.

荻原祐二（2022b）．名前を正しく読むことはなぜ難しいのか．人文×社会，2（8），1-7.

Ogihara, Y. (2022a). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, 3, e5.

Ogihara, Y. (2022b). Further explanations for difficulties in reading recent Japanese names correctly. *Frontiers in Education*, 6, 799119.

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common?: The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490.

Ogihara, Y. & Ito, A. (2022). Unique names increased in Japan over 40 years: Baby names published in municipality newsletters show a rise in individualism, 1979-2018. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, 3, 100046.

大藤修（2012）．日本人の姓・苗字・名前―人名に刻まれた歴史―．吉川弘文館.

坂田聡（2006）．苗字と名前の歴史．吉川弘文館.

佐藤稔（2007）．読みにくい名前はなぜ増えたか．吉川弘文館.

（受稿：2022 年 11 月 4 日　受理：2022 年 12 月 6 日）